

## 1. 陶芸の森の設置目的等について

- ・ 陶器産業の振興・陶芸文化の向上という設置目的の達成に向け、「情報発信ツールの拡大」、「DX,GX」、「SDGs, MLGs」、「地方創生」、「グローバル化」、「窯業技術試験場の移転」といった設置時からの状況の変化を踏まえつつ、各種事業の事業間の連携だけでなく、地域の様々な主体と連携しながら取り組む必要がある。
- ・ また、陶芸の森だけでなく、地域の様々な主体と連携しながら取り組む中で、陶芸の森の役割を明確にしつつ、信楽のまちづくりの中心としての機能を果たしていく必要がある。

## 2. 陶芸館について

- ・ バリアフリーに対応できていないなど、展示以前の問題として利用者が快適に過ごせる空間とするため、様々な個所について改良が必要である。
- ・ 展示についても、日常生活と結び付けた見せ方が必要。
- ・ 現在の収蔵庫、展示室は老朽化だけではなく、美術館としての設備・容量面で不十分な点があり、質の高い展示、世界に誇れる陶芸の森を目指すのであれば、基本的な設備の改善を実施すべきである。そうして標準以上の設備を整えていかないと将来を見据えることはできない。
- ・ 収蔵品の有効活用のためのデータベース化(将来的には、デジタルアーカイブ化することでより幅広く情報発信するため の仕組みづくり)。また、来園者に信楽焼を知ってもらう観点からも常設展の展示スペースの検討は必要であるが、今の陶芸館ではスペース的に難しく、産業展示館等の活用も含めて検討する必要がある。
- ・ 収蔵庫については、空間の有効活用、利用頻度の少ないスペースの改修による拡張など、スペース確保の検討が必要

1

## 3. つちっこプログラムについて

- ・ プログラム自体の完成度は高いが、取組みが外部から見えていないのではないかと。これまで以上に子どもたちの作品を見せていく必要がある。
- ・ 陶芸の森の継続性や地場産業の振興も視野に入れ、県も市も支援していくというスタンスを明確にし、教育という視点も踏まえて財源を確保していく必要がある。
- ・ 制作場所の確保を前提に運営主体の統合について、関係者と丁寧に協議しながら進めていく必要がある。
- ・ 試験場の研修生や若手陶芸家もつちっこプログラムに関わることで、自身の技術向上につながると考えられる。子どもの人材育成という観点だけでなく、若手陶芸家等の定着や人材育成にも寄与している。
- ・ 人材育成に占める役割など、つちっこプログラムの必要性は大きい。積極的な情報発信や財源の問題等について、県がしっかり取り組み、プログラムの強化に各関係主体も協力しながら取り組むべき。

## 4. アーティスト・イン・レジデンス事業について

- ・ アーティスト・イン・レジデンス事業(以下「AIR事業」)を継続するには、施設や設備の更新は必要。特に作家が作品制作を行う上で設備は重要である。
- ・ 過去の滞在作家等の動画作成等を行い、アーカイブ化し、県民に紹介していくことでAIR事業の魅力を伝えることができるのではないか。
- ・ これだけの規模で続けられている陶芸の森のAIR事業は、信楽の誇りでもある。ただ、陶芸の森の外で展示された方は印象に残るが、陶芸の森の中でのみ活動をされると一県民からは中身が見えないのが実情。
- ・ 滞在作家が地域の方々と関係性を構築できるよう取り組んでいく必要がある。そのことにより滞在作家も信楽の魅力を知ることができる。
- ・ 海外では国レベルで取り組んでいる。県・市といった地域レベルだけでなく、国も巻き込んでいくくらいの事業展開を目指すべき。

2

## 5. 試験場等との連携について

- ・ 試験場の収蔵品について、試験場でも展示を行っているが、より多くの人に見てもらうことが大事であり、試験場の収蔵品を陶芸の森と連携して展示できるとよい。
- ・ 試験場の資料をデジタル機器を活用して、復元・販売することが信楽の産業にも寄与すると思うが、作品の概要説明などにおいて陶芸の森が協力することでうまく魅力発信することができるのではないかと。

## 6. 公園機能の魅力化について

- ・ 屋外展示も入れ替えが必要になってくるが、展示動線をきちんと設計し、訪れた人が陶芸の可能性を感じ、町中の窯元散策にも行きたくくなるような空間づくりを。ただ、屋外展示であっても、作品の維持、また、劣化した時の対応など、メンテナンス等に係る費用等の視点も踏まえて検討すべき。
- ・ 地元企業と連携した取組があってもよいのではないかと。
- ・ 陶芸の森を訪れた方が信楽の町中にも足を運びたいくなるような町全体を公園仕立てにした歩きたくくなるようなまちづくりには市の役割も重要
- ・ 人は非日常や異空間に安らぎを感じるものであり、そういう意味で公園は重要であり、駐車場の有料化は気軽に公園スペースを利用できるという良さが失われかねない。
- ・ 精算機の設置費用等の負担のほうは収入より大きくなるのではないかと。イベント実施時には人力で行うなど検討してもよいのかもしれないが、渋滞緩和策になるのか疑問
- ・ 陶芸の森以外の周辺施設の来訪などが目的の観光バスの駐車もあることから、大型バス等の駐車に限っては、料金を徴収してもよいのではないかと。
- ・ ネーミングライツについては、施設の一部に活用ということも含めて検討してはどうか

3

## 7. 人材育成について

- ・ 陶芸の森と各主体との連携をコーディネート・プロデュースする人材が必要
- ・ 将来の人材確保という点で、教育機関との連携は非常に重要
- ・ ボランティアチームを作り、そこに若い世代も参加できる仕組みを作り、そこから将来の働き手が生まれるという流れができるとよい。また、その中でチームを先導する人材を輩出できるようになるとよい。
- ・ 企画展や事業に取り組む際、外部の専門家にキュレーターやファシリテーターという形で参画してもらい、これまでにはなかった展示の見せ方や事業展開を学んでいく体制を構築することも重要。
- ・ 県にも市にも属さない存在が主導して、地域で自立して活動できるようなチーム作りが必要。
- ・ 地域内で町おこしのための人材が生まれていく仕組み作りについては、市も取り組んでいく必要がある。

4

## 8. 他府県の類似施設の取組等について 【セラミックパークMINO(岐阜県現代陶芸美術館)】(展覧会入館者数 年間約30,000人)

### (1) 総論・運営形態

- ・セラミックパークMINOという県有施設内の一部が岐阜県現代陶芸美術館となっている。
- ・施設全体の管理は指定管理によって行っており、美術館の運営は直営。
- ・施設管理を行う指定管理者は施設創設時にセラミックパークMINOの施設管理を行うことを目的として設立された公益財団法人。

### (2) 展示機能・収蔵品等の状況について

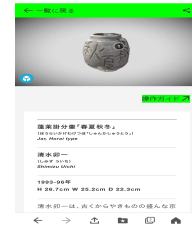
- ・特定のテーマに基づいた作品の展示が実施される特別展と、主に収蔵品を紹介する企画展が常時開催されている。
- ・1度の企画展で約50点程の収蔵品が展示され、これらの展示品は年に3回程度、入れ替えが行われる。これに加えて、他施設への収蔵品の貸し出しも行われており、これらの用途で直近5年間のうちに収蔵品全体の約半分を活用している。
- ・アート作品だけでなく、普段使いを目的として生産されるブランド陶磁器等も収蔵されている点特徴的。
- ・重要文化財や国宝の展示による集客力を感じる一方で、展示に際しての文化庁への申請に要する事務手間がかなりの負担である模様。
- ・収蔵庫が手狭であることが課題。
- ・収蔵品の一部について3Dスキャンを行い、HP上で3Dミュージアムの取り組みを行っている。



展示室1



展示室2



3Dミュージアム(HPより)

## 8. 他府県の類似施設の取組等について

### (3) セラミックパークMINO内の美術館以外のスペースについて

- ・セラミックパークMINO内の美術館以外のスペースは主に貸しスペースとして利用されている。
- ・2,000㎡以上の広さを持つ展示ホールや防音設備が整った国際会議場、野外の屋上広場等、それぞれ用途や設備が異なる複数のスペースがある。
- ・茶室は茶道連盟等が茶会の開催に利用される他、イベント等の開催を目的として貸出しの依頼を受けることもある。
- ・作陶館では一般向けに作陶に関する講座を実施している。
- ・施設内には2つのショップがあり、1つは目的外使用許可により地元の陶器振興を目的とした指定管理者が運営しており、もう1つは岐阜県現代陶芸美術館友の会が運営されている。

### (4) その他

- ・GWの時期には「美濃陶芸作家展」が開催され、地元にはゆかりのある陶芸作家の作品のみの展示・販売が行われる。
- ・駐車場は全て無料であり、今後も有料化の予定はない。
- ・ボランティアスタッフがおり、イベント実施の手伝い等を行われる。
- ・学校等からの要望に応じて作陶体験や施設内展示の鑑賞等で校外学習の受け入れを行っている。



展示ホール



国際会議場



茶室



ミュージアムショップ



作陶館